序

今年はローマクラブ東京大会が開催された．そこで，さきに発表されて全世界に衝撃を与えたＭＩＴグループの「成長の限界」が論議の対象となった．「成長の限界」に示されたこの地球上で利用し得る資源エネルギーの量や，棲息し得る人口については，まだ論議の余地がありそうである．しかし，それらに限界があり，その限界に達するまでの時間が，これまでの人類の歴史に比べてもかなり短いものであることは，誤りない事実である．

一方，私達の日常では，労働力の限界を深刻に意識しつつある．さきごろの労働省の発表では，建設業の技能労働者の不足は，昭和47年に242,800人（不足率22.8%），今年はそれが，361,900人（不足率34.2%）となり，不足率では全産業中最高となっている．

これは量だけの話であるが，質も当然低下してきているものと考えなければなるまい．

建設技術の研究に従事しているものとしては，こうした事情は，重要なファクターとして考慮する必要があろう．新しい機能をサービスする技術の研究開発は盛んであるが，同じ機能をより少ない人的，物的資源でサービスし得る技術の研究もおろそかにできまい．

それとともに，研究開発業務自体の中の無駄を省くことを考えなければならない．そのため，ひとつには事前の評価と計画を慎重に行なうことが必要であるが，一方，いろんな所で同じような調査研究をてんでにやるのを，できるだけ少なくするように皆で考えたいものである．

1973年10月

清水建設株式会社研究所　所長

工学博士　烏　田　専　右